

称号及び氏名 博士（臨床福祉学）小榮住 まゆ子
学位記番号 甲第3号
学位授与の日付 平成20年3月24日
論文名 「高齢者ソーシャルワーク実践の科学性と
実存性をめぐる統合化研究
— エコシステム構想と支援技術による実証的展開 —」

論文審査委員 主査 委員 教授 太田 義弘
副査 委員 教授 武田 建
副査 委員 教授 橋本 淳

I 学位申請論文の概要

1 はじめに

本学位申請論文は、ソーシャルワークやケアマネジメントという用語が、社会福祉施策の手段や便法として摘み食いされ、独り歩きし専門性や科学性を逸脱していく現実に対して、ソーシャルワークの原点を確認しつつ科学的方法の導入と、利用者固有の価値実現への支援を実存的な方法で実現しようとチャレンジしたものである。そのために臨床場面で利用者との参加と協働のもと、利用者の論理に基づく実存性を鼓舞しながら、高齢者ソーシャルワーク実践に科学的アプローチを導入する意義と方法を、事例研究から実証的に考察している。それはソーシャルワークの支援過程で展開される技術や技法をめぐり、支援科学としての臨床の知から近代科学の実践方法を問い直すことによって、利用者の実存や自己実現に迫ろうとしたものであり、科学性と実存性の統合化にチャレンジした意欲的なソーシャルワーク実践論である。

2 本論文の構成

はじめに

I 本研究の焦点

- 1 本研究の問題意識と課題整理
- 2 本研究の前提となる枠ぐみ
- 3 本研究の仮説および目的、方法
- 4 本論文の考察の視点および構成、研究の流れ

II ケアマネジメントをめぐる問題の明確化

- 1 ケアマネジメントの起源
- 2 わが国のケアマネジメント理論の明確化
- 3 わが国におけるケアマネジメント実践の実施状況調査
- 4 わが国のケアマネジメントをめぐる問題の明確化

III 科学的かつ実存的なソーシャルワークの概念整理

- 1 ソーシャルワークの概念
- 2 実存主義ソーシャルワークの概念
- 3 エコシステム構想
- 4 エコシステム構想における支援技術

IV 高齢者に対する生活理解と実践支援ツールの開発

- 1 高齢者の特性
- 2 高齢者をとりまく社会資源
- 3 高齢者の生活コスモスの理解
- 4 実践支援ツールのクエスチョネアと展開構想

V エコシステム構想による高齢者ソーシャルワークの展開

- 1 事例考察を通じた実証研究
- 2 事例1 家族不和により居場所のないAさんへの生活支援過程
- 3 事例2 同居から独居生活を選択したBさんへの生活支援過程
- 4 事例3 介護保険サービスの利用に向けたCさんへの生活支援過程

VI 科学的かつ実存的な高齢者ソーシャルワークの概念考察

- 1 エコシステム構想による高齢者の課題解決・自己実現
- 2 科学的支援方法としてのエコシステム構想をめぐる考察
- 3 実存的支援方法としてのエコシステム構想と支援技術をめぐる考察
- 4 科学的かつ実存的な高齢者ソーシャルワークの理論と実践への提案

おわりに

からなる内容で、一貫した論理的体系によって構成されている。

3 本論文の梗概

I (第1章)では、本研究についての問題意識、研究の課題、前提となる理論や枠組みから、研究の仮説と目的、さらに研究の方法について述べている。ソーシャルワークの基盤を逸脱したケアマネジメントの独り歩きの問題から、ソーシャルワークのレパートリーとしてケアマネジメントの再構成を課題にしている。それを前提にして、ソーシャルワークとしてのケアマネジメントが、科学性と実存性の統合化のもとに、利用者支援に不可欠な役割を果たせるという論旨で展開されている。

まず、①問題意識を明示しながら、課題を高齢者ソーシャルワークの科学的・実存的展開に設定し、②理論と枠組みは、先行研究である中範囲概念としてのエコシステム構想に求めている。③目的を設定するために、古典研究から現代の先行研究までを追究し、また調査研究によって実態を把握しながら、今日のケアマネジメントがはらんでいる問題の克服を仮説として整理している。さらに、研究目的を明示するとともに仮説考察の方法を提示し、検証しようとしている。そして、④本研究の視点や構成を研究経過から整理して、本研究の位置づけや意義をまとめている。

Ⅱ（第2章）は、本研究の中心課題となる問題の提起である。まず、①ケアマネジメントの原点を、北米でのリッチモンドの活動業績にまで遡及して究明し、ケアマネジメントをソーシャルワークの1つのレパートリーとして位置づける根拠を明示している。②わが国に介護保険制度が導入され、その運営方法としてケアマネジメントが重宝され、そこで手段や方法が逸脱し始めた問題を批判している。本来ケアマネジメントのもつ特性や意義を検討しながら、ソーシャルワークとしてのケアマネジメントのあるべき姿を考察している。次に、③実践現場でケアマネジメントがどのように機能し、どのような問題を醸しているのか、先行研究について考察しながら、実践に従事するケアマネジャーに対して調査を実施し、リアルな問題状況を浮き彫りにしている。そして、④わが国におけるケアマネジメントの問題点を整理し、先行研究との比較考察をしながら、ソーシャルワークとしてのケアマネジメントの位置づけと、方法の科学化や実存的な方法展開の必要性を指摘している。

Ⅲ（第3章）は、実践研究への枠組みと方法についての理論的考察である。最初に、①依拠するソーシャルワーク理論から概念特性を整理し、先行研究をたどりながら生活・支援・過程概念という特性を紹介するとともに、さらに、その概念特性を高齢者ソーシャルワークとして実践において展開するために、方法の科学化への詳細な課題を提起している。②支援者側の方法の科学化と同時に、他方では利用者側からの自己実現を重視し、実感形成としての実存的アプローチを導入して科学性と実存性の統合的実践を展開する視座を考察し、③高齢者の実感する生活コスモスに迫るため、中範囲概念からなるコンピュータを介在させた実践方法であるエコシステム構想を紹介している。また、共同研究から高齢者用のコンピュータ支援ツールを開発して実証研究に備えている。そして、④エコシステム構想の展開から科学性と実存性の統合化、つまり生活コスモス理解のために支援ツールという科学的な情報処理方法を駆使しながら、他方では高齢者へのアプローチに実存的な技法を用いて迫ろうとするアイデアをまとめている。

Ⅳ（第4章）は、先の理論と方法を具備したエコシステム構想の展開方法について、高齢者支援に必要な先行する実証研究から詳細な検討をしている。まず、①高齢者の特性について、エイジング概念で高齢者をとらえ直すことにチャレンジしている。高齢・老化・障害・病理という既成概念を払拭し、限界に直面しつつも自立や生き

がいから固有な価値実現へと向かって、高齢者の覆われてきた世界に支援者として参加し協働する意義を強調している。そのために、②社会福祉サービスやネットワークなどの社会資源の実像や問題、克服への課題を前向きに検討しながら、エコシステム構想を展開する背景を考察している。そこで、③高齢者の生きるコスモスを実感としてとらえるために、科学的手法を用いることの理由や論理と、それを情報収集とシミュレーションによって処理し活用する意義を考察し、そしてコンピュータ実践支援ツールの高齢者版ソフトと利用者用ツールを開発してきている。さらに、④支援ツールとしての高齢者版ソフトの特徴や内容の解説と考察から、科学的ツールを活用して高齢者支援方法に画期的なチャレンジを試みるとともに、高齢者の生活コスモス理解と生活支援について、実感という成果から実証しようというアイデアを追究している。

V（第5章）は、本研究への理論や実践方法としてまとめてきたアイデアを実証したもので論文の圧巻をなすとともに、支援科学の駆使と実存的技術のもつ意義と特性から方法の展開について論じたものである。高齢者ソーシャルワーク実践用に作成してきた支援ツールを用いて、勤務するデイサービスセンターで展開してきたエコシステム構想による実践事例の研究をしたものである。まず、①3事例の考察から実証研究の目的と方法などの検討を、過程研究として深化させたものである。②事例1としてAさんの事例は、長男夫婦との葛藤から厭世状態にあった本人に対し、支援ツールによるビジュアル化した生活のエコシステム情報を提供することによって、参加と協働を可能にし、社会的自律性の強化や家庭内での心理・社会的問題の改善が、効果的に図られてきた経過を考察したものである。③事例2は、Bさんの事例考察である。独居生活を始めるようになったことから支援関係の強化を通じて、認知症の症状改善や介護予防、家族介護の負担軽減などに成果をみた事例である。④事例3は、長男からの精神的暴力によって閉じこもり、うつ状態にあるCさんの事例で、社会資源の活用や環境調整によって家族関係の修復と介護保険サービスの利用から安定した在宅生活が可能になった事例である。

これらは、いずれも好結果に推移し、科学性と称する支援ツールを用いた支援者側へのアプローチが、生活コスモスの改善にどのように効力を発揮したのか、これについて確かな状況改善がビジュアル化されたデータで表示されている。しかし、科学的支援とともに中心課題は、利用者自身が状況改善を如何に認識し、実感しているのか、ここに最大の意義と課題が存在している。支援者側の科学的方法とともに利用者側の実感を確信へと高揚する実存性を重大視したアプローチが、本研究の中心課題として特筆されるものである。

VI（第6章）は、先行研究からまとめたソーシャルワークの理論や方法と、自らが参加・協働してきた実践事例検討から、結論として高齢者ソーシャルワーク実践の科学性と実存性への統合化について実践的方法概念をまとめたものである。①エコシステム構想を活用することの意義と効果を利用者支援の過程からまとめ、②支

援ツールを用いての科学的情報の処理と活用から、事例によって実践方法の科学性にチャレンジしてきた経緯の実証をしている。さらに、③高齢者へのソーシャルワーク支援過程の展開を、局面に対応させた科学性と実存的技術との統合化としてとらえ、そこから所期の目的を克服しようとしている。そして最後に、④改めて科学的かつ実存的な高齢者ソーシャルワーク概念の定式化と、実践行動概念としての高齢者ソーシャルワーク確立の意義をまとめ、I（第1章）にて提起してきた仮説、目的および方法と照合しながら、研究成果を検証し、残された課題や今後の研究計画を明示している。

II 学位申請論文審査の要旨

社会福祉研究が、制度・政策研究と方法・技術研究とに両極分解し、伝統的に制度研究が先行し、方法研究が追従してきて久しい。超高齢社会の出現とともに介護保険制度の制定から、やっと実践や方法研究が顕在化し普遍化するようになってきた。そして、至るところでソーシャルワークという用語が無定見に乱立してきている。しかし、その歴史的体質は変わらず、残念なことにソーシャルワークとはいえ施策展開の手段としての手法が台頭してきているに過ぎない。また一方では、科学的と称する重箱の隅を突くような方法研究も盛んである。

このような動向に対して本研究は、固有なソーシャルワーク実践研究の流れに立脚しながら、実践方法から制度や政策を問い直すというジェネラル・ソーシャルワークの視野や発想に基づき実践のフィードバックから施策を問い、さらにフィードフォワードへと実践を再構築する統合化研究の一端を担うものである。

そのアイデアを先行研究としてのエコシステム構想に求め、理論と施策を前提に実践の最先端で展開される利用者の視点から支援過程を深化させた考察である。施策や理論と実践とをつなぐために中範囲理論から支援ツールを活用し、支援者の立場より実践の科学化を試みると同時に、利用者の立場での実感形成という実存的コミュニケーションから課題解決や自己実現を成就しようとした実践過程研究である。

しかし、またソーシャルワーク実践研究が、勘と経験のみに依拠した実践から脱却するために、その反動から実践に埋没した実践者の論理で展開され、事実解明への論理や方法あるいは手段が妥当であれば科学的であるとの研究のための実証や、実証のための研究に奔走してきている動向もある。それに対して本研究は、方法の科学性と利用者主導への視野や発想との統合を具現化することで、その目的に向けた利用者と支援者との参加と協働の論理を敷衍する方法に意欲的なチャレンジをしたものである。

その実践研究は、方法論としての実践構成要素や枠組みから、方法としての実践レポーターへ、そして、それを推進する技術や技法へと展開されているが、特に支援ツールを

活用して状況と場面に対応する技術や技法の展開研究には、大きな意義がある。同時に、理論と実際とをつなぎ、理論を利用者の立場で実践的に具現化し、利用者自身の価値実現へと迫る構想には説得力があり、臨床福祉学としての実践に対して示唆に富む業績としてまとめられている。また今後に残された課題意識も明確であり、所期の目的を十分に達成していると考えられる。その固有な成果を、以下の諸点から評価することができる。

1 研究課題と目的

- (1) 急速に普遍化してきた高齢者福祉への対応が、ソーシャルワークに名を借りた小手先のサービス提供方法へと霧散してきている現実、実践現場での高齢者との出会いからソーシャルワークの本来果たすべき役割を再認識し、理念と原則、理論と実践、科学性と専門性を問い直しつつ、高齢者ソーシャルワークとしての実践方法の定式化という一大課題にチャレンジしている。
- (2) 問題の整理から課題を提起し、研究の枠組みを設定して、仮説から提起した目的を明示するとともに、論理的に体系化された考察を歴史的事実に遡及しながら理論・方法・技術・技法と展開し、事例研究という実証方法を通じて所期の目的を克服している。
- (3) 目的が意図するところは、混迷するソーシャルワークの課題への対応、理論と実践の包括・統合化、科学的・実存的方法としてのエコシステム構想の定式化、その実証的展開を目指したものであるが、目的に応じて課題を適切かつ意欲的にまとめている。

2 先行研究と研究方法

- (1) 課題考察のため問題や事象の整理については、資料や先行研究などから素材を丹念に収集・分析し、そこから対応する基礎理論や方法へと発展する論拠を内外の文献から渉猟し、研究内容の構成を有効にまとめている。
- (2) 基礎理論や方法展開への発想は、先行研究であるエコシステム構想に依拠しながら、研究の焦点や方法展開については、独自の視野や発想で先行研究に示唆を得て固有な研究方法で課題へとチャレンジしている。
- (3) 課題に対する考察を有効なものにするため、文献や資料のみならず独自の調査研究から事象を解明するとともに、実証研究ということで共同研究活動に参加し同学者と切磋琢磨することから、実践現場で活用できるコンピュータ支援ツールを試作し、目的の追究を説得力のあるものになっている。

3 研究成果とオリジナリティ

- (1) 科学性と称する支援者中心の方法に対して、利用者の実存性にアプローチするソーシャルワーク実践を強調し、異質な両特性のもつ方法的意義を積極的に活用しながら、参加と協働の支援過程に、それらの統合化された支援方法と技術や技法を実践研究として

実証している。

- (2) 高齢者による価値実現の可能性への信念と、課題解決と目的達成のためのソーシャルワークという理念と理論に対して、方法と実践とを支援ツールの活用によって統合化することから、高齢者の自己実現と成就感を引き出す実践方法の意義や効果を有効に実証している。
- (3) 共同研究から独自の2通りの支援ツールを開発し、実践支援ツールと利用者用ツールとの併用によって生活コスモスのビジュアル化を可能にし、高齢者の生活支援への局面過程の科学的展開や、そこでの支援やコミュニケーション過程の推進に意欲的にチャレンジしている。

4 研究の特徴と評価

- (1) ソーシャルワークという実体の霧散状況が抱える問題の指摘から、ソーシャルワークの原点を究明するためリッチモンドの古典的文献を克明に研究し、問題の克服を仮説として提示しながら目的を巧みに追究している。
- (2) 論旨は、前提と目的、問題の考察、考察理論、考察の視点と方法、実証研究、まとめと結論の6章から体系的に構成されており、各章は4段論法で展開され、さらに考察内容は3段論法による一貫した形式で展開されており、十分な推敲のもとに徹底した論述で構成されている。
- (3) ソーシャルワークという価値や理論、方法論や方法、技術や技法などからなる概念であり実践活動でもある実体を具象化し、利用者の参加を促進する方法に寄与するとともに示唆深いアイデアを提起している。それは、自らの視野や発想で事象を整理し、特性を比較考察するために分析し、統合化する作業という思考過程をビジュアル化することによって支援関係を強固にし、支援コミュニケーションを有効なものにすることに貢献している。

5 今後の課題

以上の評価に対して、今後の学術研究と課題に対する期待があることも付記しておかねばならない。

- (1) 高齢者ソーシャルワークにエコシステム構想を導入した展開は、壮大なものであり、価値や理論と方法や技術との包括・統合化、さらに科学性と実存性との臨床的統合化への課題には残されたものも多い。本研究で試みられた実証研究は、その片鱗を考察したに過ぎない。今後の実証研究の蓄積と深化に期待したい。
- (2) 社会福祉研究をソーシャルワーク実践研究としてとらえ直し再構成する視点が大前提にあるが、実践研究という視点から社会福祉サービスを問い直すというメゾ・マクロレベルでのジェネラル・ソーシャルワークへの実践的チャレンジも今後の一大課題である。

- (3) 本研究のために開発してきた高齢者実践支援ツールは、総論展開用のソフトウェアで実践現場での多様な事例への対応には限界がある。各種のニーズに対応できる各論的実践支援ツールの開発も今後の課題であり、その期待に応えることで本研究の究極目的が成就するものと考えられる。
- (4) 同時に、本構想の臨床的展開を蓄積し、意義や効果を実証しながら、今後の現任教育や社会福祉教育のなかで科学性と専門性さらに実存的実践を広く普遍化する努力も一大課題である。

これらをめぐって種々意見の交換もあったが、残された課題意識も明確であり、今後の実践活動と学術研究活動に、それらへのチャレンジを期待したい。

Ⅲ 学位申請論文審査の結果

最終試験結果と以上のような審査内容の要旨とをふまえ、本学位申請論文は、ソーシャルワークが高齢者の生活コスモス理解に科学的手法を用い、他方では実存的コミュニケーションから利用者の実感を確信へと高揚し、自己実現を可能にする支援過程研究に顕著な成果を残していると判定できる。またそれらは、自立した研究者として必要な能力と学識を立証していると考えられる。

ここに本審査委員会は、本学位申請論文の審査および最終試験における学力認定結果とを総合し、博士（臨床福祉学）の学位授与が適当であると認め、審査結果の報告とする。